

「一緒に喜んでください」

(ルカによる福音書 15:1-10)

ルカによる福音書 15 章は、「失われた羊」「失われた銀貨」「失われた息子（放蕩息子）」という三つのたとえによって、「失われた」ものを「見出した」喜びを伝えます。失われたものを見つけ、喜ぶのは他にもない、神です。

迷い出た一匹の羊も、失われた銀貨も何の努力もしていません。ただ、主人が捜し出します。神との関係は、わたしたちが主体なのではなく、神が主体です。「失われた」「見失う」「無くす」というのは「アポリューム」という単語で、「死ぬ」とか「滅びる」とも訳されます。すぐに神から離れて、「滅び」や「死」へと向かってしまうわたしたちを、神は救いたいと心底望み、捜し出してくださいます。その証拠に、わたしたちは神に見つけられて、今日も教会に集められています。

「羊が見つかった!」「銀貨が見つかった!」と大喜びしてくださる神にとって、他の羊でも、他の銀貨でも駄目なのです。たとえば、自分の子どもが一人いなくなったとして、ならば養子をとれば良いじゃないか、といえそうはいきません。それと同じように、神はわたしたち一人ひとりにこだわり、「あなたでなければ駄目なのだ」と、たった一人の命も失われることを望んでおられないのです。

失われていた命が帰ってきたことを喜ばれる神は、「一緒に喜んでください」と宴会を催し、「共に」喜ぶことを求めます。今日の福音書はファリサイ派や律法学者に向けて語られています。彼らは、自分たちは律法を守り、正しいという自負がありました。そして、それを守ることができない「徴税人や罪人」は救われないと考えていました。ファリサイ派や律法学者にとって、「徴税人や罪人」は「不要」で「いてはならない」人間だったのです。しかしそれは、神の思いと反します。神はたった一人の命をも失われることを望まれないのです。そして神は、そのような悪い思いを離れ、共に喜ぶことを望まれます。

さて、今日の福音はわたしたちに、神の深い愛を伝えるとともに、「あなたは共に喜んでくれるか?」「不要」な「いてはならない」人間はいないか?一緒に食事ができない人間はいないか?」と問いかけます。わたしたちはこの間に痛みを感じるのではないのでしょうか。しかし神は、この弱さを持ったわたしたちをどこまでも捜し、愛し抜いてくださるのです。その愛をいただくことでこそ、わたしたちは共に喜ぶ者へと変えられます。